Osaka University Knowledge Archive

Title	田園都市の学び舎 : メンデルスゾーン『苦悩のアルカディア』をめぐって
Author(s)	飯田, 皆実
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2009, 43, p. 95-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5667
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

田園都市の学び舎

メンデルスゾーン『苦悩のアルカディア』をめぐって

飯　田　皆　実

はじめに

世紀転換期からヴァイマル時代にかけてのドイツでは、ユートピア思想に裏打ちされた改革的な運動が展開した。近代世界に対するオールタナティブが、生活改善運動や民族至上主義、反ユダヤ主義などと複雑に絡み合いながら、多様なかたちで模索されたのである。そのひとつに、イギリスの影響を受けた「田園都市運動」 Gartenstadtbewegung がある。

本論文では、1909年ドレスデン郊外に建設された、ドイツで最初の田園都市ヘレラウを取りあげる。ヘレラウの建設については、美学・美術史、芸術教育史、政治文化史などのさまざま文脈で語られてきた。だが、従来の研究はその理念と形成過程を考察したものが大半であり、世界大戦をはさんでヘレラウに生じた変質とその意味まで論じたものは少ない。第一次世界大戦後、建設計画を実現しただけでなく、ヘレラウを舞台に芸術制作をおこなってきた主要メンバーはこの都市を去った。残った人びとは、あらためて「新教育」 Reformpädagogik を活動の中心に据え、新たな参同者もくわえて活性化をはかることで、両大戦間期からナチズム期をすごした。そうした経緯は、ニチュケや山名淳の新しい研究によって明らかにされている。以上の研究状況をふまえれば、田園都市ヘレラウは第一次世界大戦を境にして、「第一次ヘレラウ」と「第二次ヘレラウ」に分けて考えることができる。そのさい本論文が注目するのは、つぎのような証言である。

> 我々の若い熱狂的な親たちのアルカディアは、熱が冷めて、消えうせてしまった。戦争が終わったとき、彼らは本当の大人になってしまった。しかし、子どもたちにとってのアルカディアは、戦争の灰色の痛みや戦後期の憂鬱な悩みや混乱から立ち上がり、陶酔した至福感を醸していた。これまで、我々子どもは、親たちの世界で起こる大騒ぎの中で暮らしてきた。だがいまや親たちのほうが、子どもたちの世界の渦巻くような多様さの中で暮らす時が来たのである。(M11)

これは1920年当時、12歳の少年ペーター・ド・メンデルスゾーン Peter de Mendelssohn（1908-1982)が見た戦後のヘレラウである。ここで注目すべきは、田園都市建設に熱中した親たちにつれられてこの都市に移り住み、そこで成長した子どもの視線だ。つまり、新しい教育理念や独自性に富んだ教育の制度・方法の検討だけではつかみきれない、日常的な生活経験とその意識が窺われるのである。本論文では、田園都市をめぐる綱領的テクスト、学校行政文書、あるいは統計資料だけでは見えない部分、つまり「生きられた田園都市ヘレラウ」に着目したい。とりわけ、理想郷ヘレラウが育てようとした「新しい子ども」(U28)の経験を、メンデルスゾーンの学校生活に裏打ちされた小説『苦悩のアルカディア』 *Schmerzliches Arkadien* (1932)の検討を通じて明らかにするのが、ここでの課題である。

1．ヘレラウの創設者とその理念

「田園都市」 Garden City とは、エベネザー・ハワード Ebenezer Howard（1850-1928）が、1902年『明日の田園都市』 *Garden cities of tomorrow*[1)] のなかで提唱した、新しい理想の都市形態である。この提言は、工業化が進行したイギリスで、労働者の住宅問題の解決策として大きな反響を呼んだ。ハワードの構想する都市は、大都市から50キロメートル以内

の農村地帯に建設される、人口３万人程度の小都市である。土地は公有で、住民の賃料が都市基盤整備の財源となる。中心部の広場には、公会堂や美術館などの公共施設、同心円上に住宅や娯楽施設などが配置される。内部には住民が勤める工場と、食料を供給する農地を含む[2)]。つまり、都市と農村の利点をあわせもち、産業と生活が理想的に調和した職住近接型都市なのである。ロンドン北郊外のレチワースは、ハワードの理念に基づいた、最初の実践例として注目された。

なによりまず工場労働者に良質の住宅地を提供しようとしたイギリスの田園都市運動に比べて、ドイツの田園都市運動は、生活改善 Lebensreform の全面的実現をめざした点で、思想的・実験的要素が強かった。それは、1902年に設立されたドイツ田園都市協会の母体が、生活改善志向の文学者コロニー「新共同体」の知識人たちであったことからも明らかだ。協会は、レチワースに倣いながらも、独自の都市建設に尽力した。自治体とも協力関係を結び、第一次世界大戦勃発までに国内で12の田園都市を実現させていく。そのうち、最初に完成した田園都市が、ドレスデン郊外のヘレラウである。

ヘレラウには、他の田園都市と異なる特徴が２点ある。第一に、ヘレラウの創設にはドイツ田園都市協会だけでなく、ドイツ工作連盟 Deutscher Werkbund が関与したことである。工作連盟は、建築家ムテジウス Hermann Muthesius（1861-1927）、建築家リーマーシュミット Richard Riemerschmid（1868-1957）などを中心に1907年設立された。その目標は、芸術家・企業家・職人が協力して、美的に優れた家具調度品をデザインし、理想的な住環境を提案すること、しかも機械生産の導入によって比較的安価な製品を流通させること、それによって世界市場におけるドイツの競争力を高めることにあった。連盟所属の企業のひとつが、家具職人カール・シュミット Karl Schmidt（1873-1948）のドイツ工芸工房ヘレラウ[3)]である。

このシュミットこそ、田園都市ヘレラウの構想者であり、同時に最大の出資者であった。もともと、ドレスデン市内にあった工房の移転と従業員の住宅改善を検討していたシュミットは、ハワードの著作に接したことから、田園都市建設を構想するにいたる。計画実現に向けてシュミットが協力を要請したのが、リーマーシュミットとドールン Wolf Dohrn（1878-1914）である。リーマーシュミットには、ヘレラウ全体の空間構成および建築の総指揮が一任された。彼はさっそく「ヘレラウ建築・芸術委員会」を組織して、街路や住宅建築の設計や審査をすすめた。また、政治・経済・芸術など、多様な分野に通じているドールンには、「田園都市ヘレラウ有限会社」の組織管理と広報が任された。

ドイツ田園都市協会が目指したのは、自然地帯に建設する新しい都市を拠点に、生活スタイル全般を改革することだった。他方、ドイツ工作連盟の目標は、建築や家具調度品の刷新によって、理想的な住空間を創りだすことにあった。つまり、両者の目指す方向にほとんど矛盾はなく、ヘレラウ建設という空間プロジェクトにおいて、容易に結びついたのである。

ヘレラウの第二の特徴は、身体芸術教育の中心地となったことだ。その担い手は、ドールンと教育家エミール・ジャック＝ダルクローズ Emile Jaques-Dalcroze（1865-1950）である。ダルクローズは、リトミックといわれる、音楽にあわせた身体運動による教育メソッドを開発した芸術教育家で、ジュネーブを拠点に活動していた。シュミットとドールンが、ダルクローズの招聘を決意したのは、1909年にドレスデンで開かれたリトミック講習会への参加がきっかけだったようである[4)]。

1907年にはすでに、プラハの音楽学者バトカ Richart Batka が中心となって、田園都市住民に対する音楽教育の必要性が議論されていた[5)]。生活改善のさまざまな動向と親和性をもつダルクローズ式身体芸術教育の近代批判的な要素が、ヘレラウの創設者たちを惹きつけたのはまちがいない。ダ

ルクローズもまた、自分のメソッドを継続して教授できる場を必要としていた。ここで両者の利害は一致をみたのである。ドールンは、資金不足をものともせず、リトミック教育のための施設建設を進めた。その結果生まれたテッセノウ Heinrich Tessenow 設計の祝祭劇場 Festspielhaus は、ヘレラウの象徴的な建築物となった。この祝祭劇場において、ひとつの身体運動メソッドであったリトミックは、舞踏や演劇と本格的に結びついた。劇場空間と光を組み合せた演出によって独特のパフォーマンスが生みだされた結果、1912年と1913年のダルクローズ学院の学校祭、1913年秋のクローデル原作の祝祭劇『受胎告知』 *L'Annoce faite à Marie* の上演には、世界各地から多くの人が訪れることになった。

これ以外のヘレラウの教育施設としては、ドイツ工芸工房付属補習学校(1909/10-1919)と、実験的な初等教育をおこなうヘレラウ民衆学校(1914-1945)があった。両校とダルクローズ学院は協力関係を結んでいて、たとえば民衆学校の生徒が工芸製作の授業を受講したり、リトミックの指導を受けたりすることが可能だった。しかし中等教育施設としては、住民たちによる私設のヘレラウ中等教育舎しか存在しなかった。

第一次ヘレラウでの活動が順調におこなわれた期間は非常に短い。すでに1910年、シュミットは祝祭劇場をめぐるドールンとの確執が原因で、田園都市有限会社の監査役を辞任した。ドールンは1914年、スキー事故で亡くなる。まもなく第一次世界大戦が勃発すると、ドイツ軍に対し抗議声明を出したダルクローズを含め、少なからぬ人がヘレラウを去ってしまい、田園都市の理想は大きく躓くことになる。

以上、ヘレラウの創設理念とその実現にかかわった人びとの動きについて、簡単にふれた。第二次ヘレラウの動向については最終章に譲り、次章ではメンデルスゾーンの小説で語られる、ヘレラウで育った子どもの意識世界を取り出してみることにしたい。

2．『苦悩のアルカディア』

メンデルスゾーンは、トーマス・マン研究で知られる文学者・著作家である。父親ゲオルク（1886–1955）は金細工師で、ミュンヘン・シュヴァービング地区でリーマーシュミットと親交を深めた。1910年、一家は他の芸術家や職人とともにヘレラウへ移住する。当時3歳の息子ペーターは、1926年まで同地に暮らした。その後、ベルリン郊外の実科ギムナジウムをへて大学に進むが、中途退学して出版の世界に飛び込み、同時に作家活動も開始する。ナチスが政権を獲得した1933年にパリへ移住、1936年にはロンドンへ亡命し、イギリス国籍を得ている。戦後はフリージャーナリストとして各国を転々としたが、1970年にミュンヘンへ戻り、ドイツ国籍を再取得した。彼が再びヘレラウの地を踏んだのは1979年、71歳のときである。

メンデルスゾーンは、ヘレラウ中等教育舎に在籍した[6]のち、第一次世界大戦後に新設された「ヘレラウ新学校」Neue Schule Hellerau（1920–1925）[7]のドイツ部門で教育を受けた。本章でとりあげる青春小説『苦悩のアルカディア』は、彼自身のヘレラウ新学校における生活の記憶を昇華させたものと考えられている[8]。ヘレラウに滞在し、その印象を伝える短期の旅行者は多いが、そこで成長した人びとの発言は意外なほど少ない。その意味でメンデルスゾーンの小説とエッセイは、子どもの視点からヘレラウを語った、貴重な証言といえよう。

物語は、主人公ヴィンセント・ローリンガー Vincent Loringer が、長く暮らしたアルゼンチンから、あるドイツの寄宿学校へ編入した初日より始まる。ヴィンセントはドイツ人ながら、他の生徒からしばしば「アルゼンチン人」と呼ばれる。寄宿学校はハイリゲン湖の畔に建っているため、ハイリゲンシュタット城と名付けられており、ドクトルという人物が校長を務めている。ヴィンセントは3人の上級生（マンフレート、ふとっちょ、

めがね）と徐々に友情を深める。一方、「盗賊団」を名乗る5人組の生徒たちは、ヴィンセントを罠に陥れようとする。彼らは、ハイリゲン湖対岸の空き別荘「幽霊屋敷」に、盗品を隠していたが、最近誰かが住み始めたことに気づいた。ドクトルからはボート使用禁止を言い渡されているため、事情にうとい新参者のヴィンセントにひと働きさせて盗品を運びだし、最後は罪をかぶせようと企んだのである。ある夜、盗賊団に誘われボートで対岸に渡ったヴィンセントは、別荘に住む男爵の下男に捕まってしまう。だが、そこで出会った美しい少女マリアーネ Mariane が下男を説得し、ヴィンセントを学校まで送り帰した。彼はマリアーネに心惹かれたが、彼女は老男爵の婚約者で、別荘に幽閉されているも同然であることを知る。ある日、ヴィンセントはマリアーネから「助けて」と一言書かれた手紙を受け取る。湖の周囲を歩いて別荘まで辿り着いたヴィンセントは、マリアーネに脱出を提案する。しかし、ヴィンセントが眠っている間に、マリアーネの姿は消えていた。学校に戻ったヴィンセントは高熱を出して倒れ、回復したとき男爵の死が伝えられた。やがて秋の卒業試験シーズンとなり、合格したマンフレートたち上級生3人たちが、ハイリゲンシュタット城をあとにするところで物語は終わる。

物語全体は、主人公の心情の記述と登場人物の会話、そして自然描写を中心に構成されている。地名などはすべて架空のものだが、ヴィンセントと上級生が「戦争」とドイツのインフレーションに関して話す場面から、両大戦間期の物語であることが明らかだ。

主人公ヴィンセントがアルゼンチンからやってくる設定は、いささか奇異に思われる。だが、メンデルスゾーンの母親グレタ Greta Claason[9] がドイツ系アルゼンチン人であったことを考えると、作者にとっては不自然でなかったといえる。アルゼンチン時代のヴィンセントは、もっぱら家庭教師によって教育され、したがって学校での教育も集団生活も経験がない。

しかしヴィンセントは違和感を抱くことなく、ハイリゲンシュタット城の学校生活に馴染んでいく。

半年という物語の経過のあいだ、不思議なことに授業場面はいっさい語られない。森と湖という自然と近しい環境に暮らす生徒たちの、自由奔放な言動が、もっぱらヴィンセントの視点から描かれている。たとえば、到着したばかりのヴィンセントが、ハイリゲンシュタット城全体に対して明るく楽しげな印象を抱く場面。

> 幼い少年たちの一群が、スコップや鍬を担いで大声をあげながら、指定の道は無視して、庭の中を突っ切って進んでいる。日に焼けた黒い顔、もじゃもじゃで束になった髪の毛に、むきだしの汚れた膝というかっこうで、少し年かさのふたりが、樹の下を穏やかな様子で歩いてくる。そして、いくつもの開いた窓やテラスから、子どもたちの笑い声や呼び声が聞こえてくる。（SA17f.）

ドクトルや親たちは、少年たちの世界を干渉しない。恵まれた自然環境のなかで友情を育み、ヴィンセントの生活は充実したものとなる。

学校生活で少なからず重要な位置を占めるものは、音楽である。ヴィンセントは、はじめて上級生 3 人を訪ねた際に、寮の部屋でピアノを弾いて旋律を口ずさむ「めがね」の姿を目にする。訪問客を歓迎する夕べでは、ドクトルがこの学校に大勢いる「楽師」（SA41）のなかから、何人かの生徒に大ホールで演奏させる。「めがね」はピアノ、盗賊団の団長アレクシスはバイオリン、他の生徒はフルートを演奏する。

> みんなそのなかにあった。いつも考えてはいたがどうも言葉にはあらわせなかったものが。ピアノの持続的な走過のうちに、ためらいがちなフルートの音のうちに、弦の歓呼のうちに、いままで考えていたも

のが…。すべてそのなかにあった、未知ではあったがしかし愛していたものが。みんな音楽の中にあった！（SA44）

このほか、物語の展開の重要な節目になると、かならず楽器や演奏の描写がみられる。上級生マンフレートとはじめて心を通わせる場面、幽霊屋敷の出会いの場面でのマリアーネのピアノ演奏、物語の終盤に3人の上級生が旅立つ別れの場面での演奏会などは、その典型的な箇所である。

こうした描写は、同時代のドイツの中等教育機関と比較すると、その意味がおのずと明らかになる。当時ギムナジウムでは、古典語教育中心のカリキュラムによる過重負担、服装規程や余暇規則による風紀統制、教師や上級生への絶対的服従などが強いられた[10)]。それは、たとえばヘッセの『車輪の下』 *Unterm Rad*（1905）やH.マンの『ウンラート教授』 *Professor Unrat. Das Ende eines Tyrannen*（1905）のような学校小説にみられる世界である。また1920年代当時、市民階級出身の子女が家庭で楽器を演奏することは珍しくないとしても、中等教育と音楽とは簡単に結びつくものではなかった。いずれにせよハイリゲンシュタット城では、19世紀後半に完成されたギムナジウムとはまったく異質な教育が実践されているのである。それは、創造性や自発性に重きをおく芸術教育の理念を体現する施設、つまり「新教育」的な施設だ。ヴィンセントは、規則と干渉から自由なハイリゲンシュタット城に、アルゼンチン時代同様の個人主義的な教育スタイルをみたといってもよい。

しかしながら、対岸の外部世界へ足を踏み入れたことで、物語には大きな転機が訪れる。ヴィンセントは、居心地のよい、予定調和的な少年たちの世界から、突如として生身の女性と、彼女の婚約という運命に遭遇する。それは大人の世界であり、つまりは「現実」でもあるだろう。また、ヴィンセントを捕らえた、男爵に仕える下男から、ハイリゲンシュタット城に

対する評価をはじめて耳にする。

> 「向こうから来た子どもたちなのよ。あの城から。強盗じゃないわ！」
> マリアーネは開いた窓から暗闇を指した。少年は男のいかつい顔に、
> にやりとした笑いが浮かぶのに気づいた。
> 「おやまあ、ハイリゲンシュタットから！」男はうなるように言った。
> 「ここら辺じゃあ、役に立たないろくでなしで有名な団体さんですよ、
> この土地の者はみな知っていますよ、はは、当然ね。」（SA115）

祝福された場所（SA172）のはずであるハイリゲンシュタット城に対して、外部からの否定的な評価が語られるのはこの箇所のみだが、主人公が受けた衝撃はけっして小さくなかった。学校に戻ったヴィンセントは、それまで親しんできた景色を、まったく異なった眼差しで眺めることになる。彼の変貌ぶりは、周囲の生徒たちにも明らかだった。

マリアーネとの邂逅を契機に、学校生活の描写も変化する。積極的に自らの足で近隣の街や対岸へ出かけるヴィンセントや、卒業していく上級生の姿は、ハイリゲンシュタット城が結局はモラトリアム的世界にすぎず、外では別の世界が待ちかまえていることを示している。この隔絶された平和な空間は一瞬の幻であり、単なる通過点でしかないのである。

3．第二次ヘレラウと新教育

『苦悩のアルカディア』の主人公にとって、理想的な学校とその世界はある時点からしだいに色褪せていく。だが、物語のなかの「アルカディア」は、ひとりの少年の主観的世界を投影したものではけっしてない。ヴィンセントの経験は、エッセイで描かれたメンデルスゾーンの子ども時代の経験、そしてその終焉と奇妙に重なり合っているのである。以下では、メンデルスゾーンの回想を、ヘレラウじたいの変容に即して検討してみよう。

第一次世界大戦後のヘレラウが、「新教育」を中心に再出発したことはすでに述べた。もちろんそれらの制度を整えたのは大人たちだ。だが、本論文冒頭の引用でいわれているように、ヘレラウは「渦巻くような多様さ」(M11)をもった、子どもたち中心の世界へと変化したのである。

大人たちにとって議論の焦点は、ダルクローズが去ったあとの祝祭劇場をどう利用するかにあった。ダルクローズ学院じたいは、「リズム・音楽・身体教育のためのヘレラウ学校」(1919-1925)に改められた。さらに、中等教育をおこなうヘレラウ新学校もまた、同じ祝祭劇場内に開校された[11)]。初代校長に着任したのは、教育家タイル Carl Theil (?-1945)である。新学校は7歳から18歳の子どもを集め、教科教育と実技教育(農業・手工業など)、および芸術授業(身体教育・音楽・図工など)からなるカリキュラムを、他の教育施設と協力しながら展開した[12)]。

そのヘレラウ新学校に大きな変化をもたらしたのは、1921年にスコットランド人の教育家ニイル Alexander Sutherland Neill (1883-1973)が招かれ開講した、国際部の存在である。ニイルの回想によると、国際部にはイギリス人、ノルウェー人、ユーゴスラビア人などの生徒たちが所属しており、ほとんどがユダヤ系だったという[13)]。この部門は後にイギリスへ移り、児童中心教育を謳ったサマーヒル・スクールの母体となった。

メンデルスゾーンもかよった同校ドイツ部門の教師たちと国際部門のニイルとのあいだには、教育方針をめぐってかなり深刻な対立があったようである。ドイツ部門は、校長タイルをはじめとする教師および生徒を、田園教育舎系の学校から多く迎えていた。田園教育舎とは、19世紀末の青年運動や教育改革運動から誕生した寄宿学校である[14)]。青少年を物質主義の悪弊から守り、全人的な教育を実践するため、都市から離れた田園地帯に建てられた。生活規則は禁欲的で、菜食主義や冷水浴などがおこなわれた。メンデルスゾーンがタイルの人物像を、「ロマン主義的で高圧的、ニー

チェとゲオルゲ信奉者であり、謎めいて閉鎖的」(M14)だと描写しているが、これは田園教育舎ならではの教師像だろう。

一方、ニイルは対照的に「プラグマティズム」(M15) 的な思想の持ち主であった。子どもの真の自由と責任が尊重されるべきだとして、授業は自由参加、アルコール、煙草、ダンス、映画なども許容した[15)]。ニイルは後年、ドイツ部門の教育を「進歩的教育の仮面」をかぶっているにすぎなかったと批判している[16)]。たとえば、ニイルが提案したチャップリン映画の上映は、ドイツ人教師たちから「非教育的」としか評価されず、実現しなかった[17)]。ドイツ人教師たちにしてみれば、ニイルの教育方針はあまりに急進的であり、とうてい認めることはできなかったのである。

ドイツ部門の生徒たちは、校長タイルの「神秘主義的な権威」(M15)に強く惹きつけられる一方、極端に放任的なニイルの教育方針にもまた、魅力を感じていた。じっさいメンデルスゾーンは、生徒たちがタイルとニイルの根本的な相違点を見抜き、また学校内の緊張状態を察していたと証言している。(M15)

だがメンデルスゾーンの記憶にのこるヘレラウ新学校での日常生活は、たとえばつぎのように語られている。

> 教室は天井の高い白くて涼しい部屋だったが、私たちがそこで座って過ごすことはめったになかった。外で夏の正午の太陽があまりに強くきらめくとき以外は。そうでないときは、戸外で勉強した。近くの湖にハイキングしたり、泳いだり、歌ったり、遊んだりして。それから、現在は学生寮と呼んでいる、古いペンションハウスのテラスに、夜更けまで座って、先生やマイスターのお話や講義に耳を傾けた。(M16)

ここでいう教室とは、祝祭劇場内の一室だろう。時間割どおり教室に座っていることが義務づけられたギムナジウムとは異なり、時間の使い方は

まったく自由である。知識のつめこみではないヘレラウ新学校での教育の一端を、ここに垣間見ることができる。こうした環境をさして、メンデルスゾーンは「魔法にかけられた小世界」unsere verzauberte Provinz (M18) という。大都市の喧噪から離れた自然のなかで、規律や服従から自由になった少年たちの生活は、「魔法をかけられた」というよりむしろ「呪縛を解かれた」というべきだろう。外界を知らない少年たちにとって、「調和的」で「健全」なヘレラウの世界は、まさにユートピア的である。

しかしメンデルスゾーンは、ひとりの女生徒のエピソードを添えることを忘れない。ある日、ドロテア・ヴィーク Dorothea Wieck が学校から姿を消してしまう。彼がドロテアを再び見かけたのは、ベルリンの映画館のスクリーン上だった(M18)。ドロテアが自分たちの世界を捨てて、決然と「生」 das Leben (M19) に飛びこんでいったことは、少年ペーターにとって衝撃的であった。しかも、彼女が女優として成功しているのは、輝かしさと猥雑さにまみれたショービジネスの世界である。それは、さきのニイルと映画上映のエピソードからも明らかなように、「芸術的」で「健全」な子どもを育成するというヘレラウの教育にはそぐわないものだ。ドロテアは、ヘレラウ新学校の世界が「不滅」でも「不変」でもないことを、果敢な行動によって示したのである。アルカディアと思われた学校世界は、「甘美だが苦痛をもった圧政」 in einer süß-schmerzlichen Tyrannis (M19) にほかならない。もっと別の大きな世界が外部に存在していることに、少年ペーターは思い当たらざるをえなかったのである。

第二次ヘレラウの中心的な担い手たちは、新教育によって「新しい子ども」(U29) を育成することで、田園都市の理想をつなごうとした。そのために、まったく異なった教育理念をもつ教師を国外から招きさえした。同時に、民族主義的な教育思想を有する人物や団体の活動をも容認した[18)]。それがまさしく、1920年代のヘレラウに渦巻いていた「多様さ」(M11) で

あり、調和的であるべき「アルカディア」に、痛み Schmerz をともなった不協和音をもたらした。こうしたヘレラウ内部の不協和音は、1920年代のヴァイマル文化が、見かけ上の繁栄と安定の内側に抱えていた多種多様なイデオロギーの相剋とも響き合う。つまり、1920年代のヘレラウは、同時代のドイツ社会の縮図をなしていたといえるのである。

1925年前後、結局立ちゆかなくなった新教育施設が撤退した後も、ヘレラウを創設した親世代は教育に固執し、女性教育家を招いている。だが子どもたちは、新しい視聴覚メディアや大衆文化に誘われて、外の世界へ飛び出していく。そのとき、この田園都市を外側から眺めた彼らにとって、ヘレラウはもはや魅力を持たなかった。1920年代後半以降、ふたたび混乱するドイツの政治と経済のなかで、ヘレラウの没落は決定的になる。「アルカディア」の輝きは、永遠に失われたのである。

使用テクスト及び省略記号

SA: Mendelssohn, Peter de: *Schmerzliches Arkadien*. Berlin 1932.
U: Ders.: *Unterwegs mit Reiseschatten*. Frankfurt a. M. 1977.
M: Ders.: *Hellerau. Mein unverlierbares Europa*. Dresden 1993.
テクストからの引用には、末尾に省略記号、アラビア数字でページ数を記した。

注

1）1898年に出版された『明日－真の改革への平和な道』 *To-morrow: a Peaceful Path to Real Reform* から書名が改められた。
2）Howard, Ebenezer: *Garden cities of to-morrow*. London 1902.
3）シュミットの工房は、ドイツ工芸工房ミュンヘン及び同ベルリンと提携して、1910年に「ドレスデン工芸工房カール・シュミット」から名前を改めた。
4）Vgl. Sarfert, Hans-Jürgen: *Hellerau. Die Gartenstadt und Künstlerkolonie*. Dresden 1995, S.29.
5）Nitschke, Thomas: *Die Gartenstadt Hellerau als Pädagogische Provinz*. Dresden 2003, S.21-22.

6）第一次世界大戦中に、ヴォルフ・ドールンの息子と共に社会改革を叫んで配ったビラでは、自らを指して「ヘレラウ私設学校生徒」と名乗っている。Arnold, Klaus-Peter: *Vom Sofakissen zum Städtebau. Die Geschichte der Deutschen Werkstätten und der Gartenstadt Hellerau*. Dresden und Basel 1993, S.360.

7）以下、教育施設の日本語名称及び開設時期は、山名淳『夢幻のドイツ田園都市　教育共同体ヘレラウの挑戦』（ミネルヴァ書房 2006年）を参考にした。

8） Sarfert: a.a.O., S.128.

9） Fasshauer, Michael: *Das Phänomen Hellerau. Die Geschichte der Gartenstadt*. Dresden 1997, S.189f.

10）望田幸男・田村栄子『ハーケンクロイツに生きる若きエリートたち　青年・学校・ナチズム』（有斐閣 1990年）73ページ以下。

11）そのほか、祝祭劇場に拠点をおいたのは、建築家テッセノウを中心とした、「ヘレラウ工芸職人ゲマインデ」（1918-1926）である。

12）山名前掲書234ページ以下。

13） Neill, Alexander S.:, *Neill! Neill! Orange Peel!'*. London 1977, S.110.

14）竹中亨『帰依する世紀末　ドイツ近代の原理主義者群像』（ミネルヴァ書房 2004年）211ページ以下。

15） Sarfert: a.a.O., S.83.

16） Ebd., S.108.

17） Neill: a.a.O., S.110.

18）作家兼出版業者タンツマン Bruno Tanzmann による民族主義的な啓蒙運動は、1920年代から急速に高まりをみせた。1924年には「アルタマーネン」Artamanen と呼ばれる青年運動同盟を結成して、労働奉仕活動をおこない、ポーランド人をはじめとする外国人農業労働者を追放しようとした。1926年に、タンツマンの出版社とアルタマーネンの事務所は、祝祭劇場に移されている。

（大学院博士後期課程学生）

RESÜMEE

Reformschule in der Gartenstadt Hellerau
Zum Roman *Schmerzliches Arkadien* von Peter de Mendelssohn

Minami IIDA

Die Gartenstadt war eine Gestalt der neuen idealen Stadt, die Ebenezer Howard (1850–1928) in England mit seinem 1902 erschienen Buch *Garden cities of to-morrow* entworfen hatte. Nach seiner Idee wurden Gartenstädte nicht nur in England sondern auch in Deutschland gegründet.

Hellerau war die erste, zugleich vollständigste und radikalste Verwirklichung einer Gartenstadt in Deutschland, die 1909 bei Dresden entstand. Mit der Idee der Gartenstadt waren auf stark sozialreformerische Ideen verbunden. In Hellerau stand in den Anfangsjahren besonders die moderne rhythmische Erziehung von Emile Jaques-Dalcroze (1865–1950) im Zentrum des Interesses aus vielen Teilen der Welt. Der 1. Weltkrieg vertrieb jedoch viele Gründungsmitglieder aus Hellerau, die für die Anfangsentwicklung in dieser Gartenstadt treibende Kräfte gewesen waren. Nach dem Krieg stellte Hellerau die Reformpädagogik ins Zentrum des Wiederaufbaus und berief einige Pädagogen als neue Mitglieder.

Der Journalist und Schriftsteller, Peter de Mendelssohn (1908–1982) zog 1910 als 3-jähriges Kind zusammen mit seiner Familie nach Hellerau und lebte bis 1926 in der Stadt. Er besuchte dort die Reformschule „Die Neue Schule Hellerau“. In seinem Roman *Schmerzliches Arkadien* und seinen Essays kann man das Alltagsleben in der Schule und das Bewusstsein der dort vermittelten Erziehung erkennen.

In meiner Darstellung soll anschaulich beschrieben werden, mit welchen Konflikten die Anfangsjahre durch die neuen pädagogischen Ansätze der hoffnungsvoll zusammengekommenen Pädagogen behaftet waren und wie die Schüler diese Konflikte im Arkadium Hellerau selbst erlebt haben. Hierzu werden die besonderen Erziehungssysteme und -methoden in Hellerau durch die Analysierung des Romans und seiner Berichten von Mendelssohn beschrieben.

キーワード：田園都市、新教育、生活改善運動、メンデルスゾーン